

## 2. [雲南市立病院の建設について]

木次町会場（チェリヴァホール）

**Q7：**県立中央病院に行かないでもいい病院にしてほしい。病院の建設はとにかく急いでいただきたい。庁舎を後にしてでも先にしてほしい。

A：県立中央病院に行かなくてもいい体制をつくってほしいとのことですが、そうなるように努力しなければと改めて痛切に感じた。医師不足に陥ってから診療科縮小などご迷惑をおかけしている現状についてお詫びしたい。活気のある病院に戻るよう目指しているのもうしばらく時間をいただきたい。建物が新しくなることは、職員のモチベーション、また新しい医者が赴任する大きな要因になると期待している。（病院事業管理者）

A：病院の順位は最優先に考えているのでぜひご理解いただきたい。（市長）

**Q8：**14診療科ということだが、常勤医師が何人いるのか、看護師が何人足りないのか、具体的にどうするのか聞きたかった。医師は一人前にするのに最低10年はかかる。提案としては、例えば雲南市で自治医大方式にして、卒業後10年間は雲南病院に勤めてもらうこととすれば良いのではないか。

A：平成15年は常勤医師が35人いたが、現在18人で約半分である。本当にこの規模の病院を守れるのかということだが、実は雲南病院は病床利用率90%でニーズは非常に高い。自治体病院では県内トップクラスの利用率。最低限そのためのスペースを作らなければならない。医師確保については、地道に努力しており、眼科の常勤の復活が見えてきており、皮膚科も常勤になった。奨学金制度はどうかということだが、島根県には地域枠推薦というものがあり、毎年県内約10人の医者のたまごが入学するが、雲南市から一番多く取っていただいている。今年は10人中4人が雲南市の出身である。この学生が将来また雲南市に帰ってきてくれば、将来的に25人くらいは、と期待している。そうなればご提案した一般病床199床、トータル288床は何とかなるのではという見込みである。魅力ある病院づくりをしなければならないが、そのためにもきれいな病院が欲しい。例えば出雲市まで行く交通手段がない患者等、社会的弱者を何とかしてあげたい。ぜひとも雲南病院を守っていききたい。（病院事業管理者）

**Q9：**医者はどういう方法で確保しているのか。というのも、私の子どもが島大の医学部を出て2年前に県内の病院に勤めたが、島根県医療政策課から私の家に文書がきて「どこにお勤めか存じませんが」と書いてあった。課長に電話して医師の勤務先もわからないのはおかしいのではと言った。そういう情報はきちんと把握して、アプローチしていくことも大事ではないか。市ではその点はどうか。

A：医師確保の方法については、従来から行っている、大学の医局を回りお願いする方法がある。また県医療対策課とも連絡を取り合っており、求人募集の情報が入ってきており、年間数人は面接する。最近では、他県からホームページを見て来てくれた例もある。ただネット上の広告をもう少し活用する必要がある。名簿については、昨今個人情報について非常に厳しいため、なかなか手に入らない。皆さんにも紹介をしてもらえるとありがたい。ぜひご協力をお願いしたい。（病院事業管理者）

**Q10：**病院裏の駐車場から入るが、かなり距離があり、雨が降ると年寄りは大変なので、屋根をつくってほしい。また裏から入ると扉がいくつもあり受付まで遠いので、もう少し簡単に入れるような設計にしてほしい。

A：予定では現在の西棟を壊して、そこに新棟を建設する考えであり、この建物前に駐車場ができる形。屋根

づくりは今回の建設ではできない旨ご了承いただきたい。建て増し、建て増しのため裏から入るとドアが何か所もある。防犯上の問題もあり、現段階では解消できないが、建設に向けてはそういった不便さをなくすように考えていきたい。(病院事業副管理者)

**Q11**：雲南病院は中核病院と言われるが、ドクターヘリがよく飛んでいることから分かるが、松江や出雲の大きい病院に患者が流れている現実がある。そういう意味からも雲南病院は庁舎よりも一番最初に手掛けるべきだったと思うし、ましてや加茂に予定されている拠点施設については、本来は病院の中にあるべきで、病院と一体となったほうがベターではないのか。

**A**：市立病院については、雲南市だけでなく雲南医療圏域1市2町全域を範囲とする中核病院という意識を持って建て替えるに臨む。また、病院を庁舎よりも先にすべきとのご意見だが、庁舎は合併特例債が使える範囲内という大前提があり、26年までに建てないと有利な財源を失ってしまうために病院より先にやってきた。合併特例債は5年延長になったが、26年に建てるという実施計画を作って、その裏付けとなる財政計画も作っていたため、病院を先にということになると総合計画全体を見直さなければならぬため、それは不可能である点をご理解いただきたい。

拠点施設を病院の中に作ったほうがよいということだが、施設の中身は25mの複数コースの温水プールで、病気にならないために子どもも含めたあらゆる年齢層がスポーツやリハビリで使うことを想定している。子ども用、高齢者用とスペースが必要で、市立病院にはそんな大きいものは建てられない。医療費の削減を目指すためにもその役割を果たすべきである。しかしながらまだまだ理解されていないと思うので、時間を掛けて理解してもらうことが必要であり、28年を目標にしている。それでもまだ理解されなかった場合は建てることはできない。そうならないためにも機会を持って市民の皆さんとお互い理解を深めていく必要がある。(市長)

**A**：救急ヘリについて、日本の医療は救急に関しては二次救急、三次救急に分けられている。三次救急は命に直結する病気。その対象病院は県立中央病院と松江日赤病院。私どもは二次医療圏。入院は必要だが命には直ちに直結しない病気を扱う。三次救急に関しては県立中央病院と松江日赤病院が行うような体制を国・県が取っている。ひとりでも多くの命を救おうということでこの救急ヘリが始まった経緯があることを理解いただきたい。

病院の中に温水プールをという意見があったが、この医療と保健の融合施設は病院とはまったく別物と捉えている。融合施設は子どももお年寄りも障がい者も同じ環境の中でいろんな運動をしてお互いの健康維持を図っていく。病院は病気の方を治すためのリハビリで、健康を増進するためのものとは意味合いが違っていると捉えており、病院の中に作る考えはまったくない。(病院事業管理者)